

開催地名	奈良県 安堵町
開催日時	令和6年11月24日(日)10:30~12:00
開催場所	安堵中央公園体育館
語り部	小寺 昭夫(岡山県倉敷市)
参加者	安堵町安全安心課5名 他議員、区長、住民含め150名
開催経緯	当町は、大雨に伴う洪水警報によって内水被害が多数発生しております。 そのため、住民の防災意識が高い中で同様の被災地からの実体験を交えた講演会を行い、被災地での活動等実体験の話を聞く機会を設けて、参加者に防災意識を向上させることを目的としたため。
内容	■はじめに 講演者の小寺昭夫氏は、岡山県倉敷市消防局に所属し、平成30年7月豪雨(西日本豪雨)において、現場での救助活動に従事した経験を持つ。特に倉敷市真備町では記録的な水害が発生し、多くの住民が被害を受けた。その経験をもとに、本講演では災害発生時の対応や救助活動の実態、早期避難の重要性について語った。 小寺氏は、実際の救助現場で直面した困難を交えながら、「自助」「共助」「公助」の重要性を強調し、水害時の適切な避難行動やハザードマップの活用が命を守る鍵であることを訴えた。 ■あの日のこと 平成30年7月、西日本豪雨によって倉敷市真備町では小田川の堤防が決壊し、広範囲にわたる浸水被害が発生した。最大で5メートル近い水位に達した地域もあり、町の約4分の1が水没。多くの住民が逃げ遅れ、自宅の屋根や2階部分に取り残された。 水流が非常に強く、流木や漂流物が障害となり、救助作業は困難を極めた。特に夜間の浸水進行が急激であったため、住民の多くが適切な避難行動をとれず、救助の依頼が相次いだという。 ■その後のこと 西日本豪雨の復旧には長期間を要し、倉敷市では災害後の対応として以下のような取り組みが進められた。 1.排水活動の強化 ○全国の消防・自衛隊の協力のもと、排水ポンプを用いて浸水地域の排水を実施し、早期の復旧を目指した。 2.避難所運営の課題改善 ○長期間の避難生活では、ストレスや健康問題が深刻化した。プライバシー確保のための間仕切りの導入や、物資配給の適正化など、避難所運営の見直しが求められた。 3.防災インフラの強化 ○小田川の付け替え工事が計画より早く完了し、今後の水害リスクを低減するための治水対策が強化された。 4.地域住民への防災教育の推進 ○過去の災害を教訓に、住民向けの防災講習やシミュレーション訓練を実施し、避難行動の重要性を伝える取り組みが進められた。 ■まとめ 小寺氏は、西日本豪雨を通じて得た教訓として、以下の点を強調した。 1.早期避難の重要性 ○ハザードマップを事前に確認し、自宅や職場が危険地域にある場合は、災害発生前に避難を決断することが命を守る最善の手段となる。 2.避難の判断基準を明確にする ○「まだ大丈夫」と考えている間に水位が急激に上昇することがある。自治体から避難情報が発令されたら、すぐに避難行動をとることが重要である。

	3.地域での共助の強化 ○高齢者や障がい者など、自力で避難することが困難な人々を支援するために、地域ぐるみで防災計画を立て、助け合いの意識を高めることが必要である。 4.防災教育の徹底 ○避難訓練や防災ワークショップを定期的実施し、住民一人ひとりが「自分の身は自分で守る」という意識を持つことが大切である。 最後に、小寺氏は「防災対策は特別なものではなく、日常の中に取り入れ、いつでも実行できるようにすることが重要だ」と述べた。災害はいつどこで発生するかわからない。だからこそ、普段からの備えや地域のつながりが、いざという時に命を守る鍵となると締めくくった。 
開催地より	平成30年7月に発生した岡山県倉敷市真備町の豪雨災害で実際に災害対応に当たった消防隊員氏の実体験を交えた講演であったので、講演会の内容に臨場感があり、個別避難計画や自主防災組織との連携に具体性があり今後の防災活動に活かしていきたいと考えます。